



Title	青年の将来展望研究に関する一考察-将来次元の重要性を考慮する意義-
Author(s)	尾崎, 仁美
Citation	大阪大学教育学年報. 1999, 4, p. 87-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11643
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

青年の将来展望研究に関する一考察 ～将来次元の重要性を考慮する意義～

尾崎仁美

【要旨】

本稿の目的は、青年の将来展望に関する研究を概観し、今後の方向性を検討することである。将来展望に関する研究については、(1)量的側面と(2)質的側面の観点から概観した。(1)量的側面については、認知的側面（将来展望がどれだけ広がっているか）と情緒的側面（将来に対して肯定的か否定的か）に関する研究を取り上げ、(2)質的側面については、外在的視点（調査者があらかじめ項目を設定し、被験者に選択させる方法）による研究と内在的視点（被験者に自由に表出させる方法）による研究を取り上げた。

これらの研究にみられる問題点を検討した結果、将来次元が個人にとって重要な意味をもつかどうかを考慮する必要性が浮かび上がってきた。今後の研究では、将来次元に対する個人の重要性を考慮した上で、展望の広がりや内容を検討していくことが必要であろう。

はじめに

青年の将来展望に関する問題は、心理学の実証的研究において、これまでどのように扱われてきたのであろうか。また、今後こうしたテーマを扱っていく上で、どのような点を考慮する必要があるのであろうか。本稿はこれまで行われてきた研究を概観し、青年の将来展望研究における今後の方向性について検討することを目的とするものである。

青年の将来展望に関する問題は、どの程度展望が広がっているか、どの程度将来を肯定的にとらえているかという時間軸に焦点をあてた時間的展望研究、時間的展望の質的側面に注目した人生設計や人生展望の研究、あるいは青年が理想とする生き方を直接的にとらえるライフスタイルや人生観の研究など、多様な観点からアプローチされてきた。ここでは、これらの研究を大きく将来展望の量的側面と質的側面とに分類し、以下に概観する。

第1節：将来展望の量的側面に関する研究

時間的展望には、(1)広がり (extension) や密度 (density) などの認知的側面と、(2)過去・現在・未来に対して肯定的か否定的かという情緒的側面とがあるとされている（都筑, 1982）。時間的展望には、過去・現在・未来が含まれるが、ここでは将来展望に関する未来次元のみを取り上げる。

1. 認知的側面について

Lewin (1951) は、児童期から青年期へと移行するにつれて、時間的展望に変化がみられることを指摘している。第一は時間的展望の拡大であり、年齢に伴い、より遠い未来の事象が現在の行動や感情に影響を与えるようになる。第二は、時間的展望の現実的水準と非現実的水準の分化であり、年齢とともに現実的な期待や目標と単なる空想や夢とが分かれてくる。児童期や青年期を対象とした研究では、加齢とともに将来展望が拡大し (Shannon, 1975; Verstraeten, 1980), 展望の内容が現実的になる (Lessing, 1968; Nurmi, 1989) という Lewin の説を支持する結果が報告される一方で、将来展望の広がりは年齢とともに減少するというまったく逆の結果 (Lessing, 1968; Trommsdorff, Lamm & Schimidt, 1979; 白井, 1985) や、広がりに違いはみられないという結果 (Wohlford & Herrera, 1970; Cottle & Pleck, 1969) も報告されている。また、性差については、将来展望の広がりは男性の方が大きい (Lessing, 1968) が、密度は女性の方が高い (Platt & Eisenman, 1969) ことが報告されているが、広がりに性差はみられないという指摘もある (Wohlford & Herrera, 1970)。適応との関係についても一貫した結果が報告されておらず、非行少年は一般少年よりも未来の展望が短い (Barndt & Johnson, 1955; Brock & Giudice, 1963; Davis, Kidder & Reich, 1962; Klineberg, 1967; Stein, Sarbin & Kulik, 1968; Siegman, 1961) と報告される一方で、わが国では非行少年と一般青年に違いはみられないという報告 (南雲・川口, 1979) や、小学生では対他者関与の積極的な者が将来展望が長いが、中学生ではその逆になる (白井, 1985) という報告もみられている。

2. 情緒的側面について

情緒的側面に関しては、児童期や青年期を対象とした研究において、年齢とともに将来のとらえ方が否定的になることが一貫して報告されており (Coleman, Herzberg & Morris, 1977; 白井, 1985; 1986), 性差については、女性の方が男性よりも未来をポジティブにとらえていることが報告されている (Lens, 1975)。また、適応との関係については、未来的時間的展望の明暗が生きがい感や幸福感などの生活感情、現在の生活満足度と強い関連を示すこと (小宮山, 1973b; 1975), 将来に対して肯定的な者は対他者関与が積極的であり (白井, 1985), 自分自身についても肯定的な態度をもっていること (小宮山, 1989), 自我同一性を達成している者が将来への不安が少なく、将来を肯定的にとらえていること (都筑, 1993b; 根本・中沢, 1990), 一般少年と比較して家出少年群が将来に暗い展望をもっていること (小宮山, 1965) など、未来を肯定的にとらえている方が適応的であることが報告されている。

3. 従来の研究にみられる問題点

以上、将来展望の量的な側面について概観してきた。情緒的側面については比較的一貫し

た結果が報告されているのに対し、認知的側面に関しては、ほとんど一貫した結果が得られていない。以下、その問題点について検討しよう。

第一は、測定法の妥当性である。時間的展望の測定法としては、(1) “TAT (Teahan, 1958)”, “Story Completion Test (Barndt & Johnson, 1955)”, “Circles Test (Cottle, 1967)” や “Lines Test (Cottle & Pleck, 1969)” などの投映法的な技法、(2)自分の将来に起きると思われる出来事を自由に述べさせる “Events Test (Wallace, 1956)” や最近 2 週間のうち被験者が考えたり思ったりしたことを列挙させる技法 (Teahan, 1958) (3) “Incomplete Sentence Test (Lessing, 1968)” のように、調査者が準備した未完成の文章（私が～歳になったとき、私は～できる）に自由に記入する文章完成法など、数多くの技法が開発されている。しかし、展望の広がりを TAT でとらえた場合と Events Test でとらえた場合とで、自己像の肯定性との関連の仕方が逆になるという陶山 (1988) の報告にみられるように、用いる測定法によって得られる結果が異なるものも見受けられる (Klineberg, 1967 ; Lessing, 1972 など)。また、それぞれの測定法の相関係数はそれほど高くないこと (陶山, 1989 ; Lessing, 1968) などを考慮すると、各測定法の妥当性が十分に検証されているとはいがたい。今後、それぞれの測定法が時間的展望のどういった側面を測定しているのかを十分に吟味する必要があろう。

第二は、結果の解釈の問題である。測定法の問題とも関連するが、白井 (1994) や大橋・大橋 (1989) は、展望の広がりに関する解釈について次のような点を指摘している。たとえば、Stein, Sarbin, & Kulik (1968) の研究では、人生において一般的に出会う出来事をあらかじめ調査者が設定し (“あなたは何歳で結婚しますか” “あなたは何歳で車を買いますか” など)，その質問に答えてもらうという方法によって展望の広がりがとらえられている。その結果、非行少年が一般高校生よりも「外国へ行く」「車を買う」「第一子が生まれる」「退職する」「子どもが結婚する」時期が早いことが見出されているのだが、これは非行少年は将来展望が短く、将来のことを考えて行動できないために、適応に失敗しているということを意味するものだろうか。単に、非行少年はそれらの出来事が一般青年よりも早いと認知しているだけなのかもしれない。「ヒーローになる (Be a hero)」時期は一般高校生の方が早かったが、希望的な事象は近い未来として認知される傾向があるともいわれる (山中, 1970) ように、肯定的な事象の場合は短い方が望ましいともいえよう。つまり、ここでとらえられた展望の広がりは、適応・不適応の問題ではなく、単なる個人の意味づけの違いとして解釈できるものではなかろうか。

同様の点は情緒的側面の研究においても指摘できる。従来の研究では、将来を肯定的にとらえていた方が適応的であるという結果が一貫して報告されてきたが、非行少年を対象とした研究では、非行少年も将来を明るくとらえていること (土中, 1988) や、将来への不安は非行少年よりも一般少年の方が高いこと (小宮山・松本・渥美, 1966) が報告されている。しかし、こうした結果に対して、調査対象とされた非行少年が適応的な状態にあると解釈されるかといえばそうではない。「一般少年の方が将来を真剣に考えるために、必然的に不安も高まる」 (小宮山他, 1966), 「非行少年は不連続に現在や未来を位置づけている」 (河野, 1994) などのように、将来に対する意味づけを推測することによって結果が解釈される。ここでも、どれだけ将来を肯定的にとらえているかのみでなく、個人が将来をどう意味づけて

いるかということが問題となる。

勝俣・篠原・村上（1982）によれば、非行少年は「現在は現在であって、過去や未来とは関係がない」と答える者が多く、将来を不連続なものとしてとらえているという。また、非行少年の描く将来展望は願望や空想の混入した非現実的なものであり、将来は彼らの生活空間にさほど重要な意味をもたないこと（山本他, 1968）や、非行少年の未来への目標は、現在の生活に全く影響を及ぼしていないということ（小宮山・星・高橋・川田, 1976）も指摘されている。この場合、どんなに長期的で肯定的な将来展望をもっていても、それは現在の個人のあり方にほとんど意味をもたないのでなかろうか。したがって、将来展望の量的側面に関しては、単に展望の広がりが大きいかどうか、将来が明るいかどうかということのみを問題にするのではなく、それが個人にとってどのような意味をもつものかを合わせてとらえる必要性があろう。このことはまた、測定法の妥当性を見直すことにもつながると思われる。

ここでは年齢差、性差、適応との関係に関する時間的展望研究をとりあげたが、その他、社会階層による差（Cottle & Pleck, 1969；LeShan, 1952；Lessing, 1968；Kendall & Sibley, 1970；Lamm, Schmidt & Trommsdorff, 1976）や、学業成績および知能指数による差（Teahan, 1958；Lessing, 1968；Epley & Ricks, 1963）、文化差（Roberts & Greene, 1971；Meade, 1971）なども検討されている。しかし、ここで指摘したように、将来展望そのものが個人にとってどういう意味をもつかを考慮しなければ、何らかの要因による差がみられた場合にも、なぜそのような差が生じるのかということを解釈していくことが難しいのではなかろうか。

第2節：将来展望の質的側面に関する研究

時間的展望研究に積極的に取り組む都筑（1982）や園田（1989）は、従来の時間的展望研究が展望の広がりや明るさという量的側面に関心が向けられていたことを指摘し、「ある個人が自分の人生において、どのような内容の目標や希望を思い浮かべ、それに対してもなる意味づけをしているのか」という時間的展望の質的側面を検討する必要性を主張している。

将来展望の質的側面をとらえる方法としては、調査者があらかじめ項目を設定し、被験者に選択を求めるものと、自由記述や作文など、被験者自らに回答を委ねるものとがある。自己概念研究を位置づける中で、溝上（1995）は両者をそれぞれ「外在的視点による方法」と「内在的視点による方法」として区別している。以下、それぞれの方法を用いた研究について概観しよう。

1. 外在的視点による方法を用いた研究

ここでは、将来展望として、個人がどのような生き方を望んでいるかという観点から調査

されたものを取り上げる。これらの研究は、時間的展望の研究とは異なり、どれくらい先の将来を展望しているかを考慮することはできないが、青年が希望する将来展望の内容をとらえることが可能である。尾崎（1996）によれば、個人が望む将来の生き方には、「弁護士になりたい」「25歳で結婚したい」「結婚しても仕事は続けたい」など、職業や結婚に言及した具体的なライフスタイルのみでなく、「人の役に立つ生き方がしたい」「前向きな生き方がしたい」など、抽象的な生き方観も含まれる。

まず、ライフスタイルの研究については、主に女性を対象として実施されることが多く、扱われるパターンも時代に合うよう改良されつつある。近年わが国でみられる研究としては、O'Connell (1976) の考案した「伝統型（結婚あるいは第一子誕生後、専業主婦）」「新伝統型（子どもの養育が済んだ後、職業に復帰）」「非伝統型（結婚・子どもの養育とともに職業にも就いている）」という3つのライフスタイルに「脱伝統型（結婚・出産を経験せず、職業に就いている）」を加えた佐藤・赤澤・寺川（1996）の研究、また、類型名は若干異なるが、佐藤らの「新伝統型」を「Uターン型（ある程度子どもが成長したら正職に復帰）」と「Jターン型（ある程度子どもが成長したらパート程度の仕事をする）」に分類し、さらに「DINKS型（結婚はするが子どもは産まず夫婦で共働き）」を加えた桑原・伊藤（1994）の研究などが挙げられる。女性を対象に調査した結果、約半数の者が「新伝統型」を望んでいることが示されており（佐藤他, 1996；都筑, 1990），それらを2つに分類した桑原・伊藤（1994）の研究でも「Uターン型（34.2%）」「Jターン型（31.7%）」の両型が1, 2位を占めている。また、男性が女性に求める生き方は「Jターン型（44.5%）」が圧倒的に多く、ついで「専業主婦型（18.3%）」であった。これらの結果から、桑原・伊藤（1994）は、女性は仕事と家庭を等価と考えているのに対し、男性は女性に対して家庭を大事にして欲しいと願っていると考察している。性差以外の要因としては、専門学校生と短大生の意識の違いを比較調査した研究（松下・国眼, 1993）などもみられる。

また、抽象的な人生観を扱った研究については、Morris (1956) による13の生き方類型（中庸型・達觀型・慈愛型・享楽型・協同型・努力型・多彩型・安楽型・受容型・克己型・瞑想型・行動型・奉仕型）を用いた研究が数多く見受けられる。これらの生き方類型をもとにして、時代差（Misumi & Ando, 1964；見田, 1966；岩崎・石塚・原, 1984；岡林・大井・原, 1995）、性差（岩崎他, 1984；田中, 1973；尾崎, 1994）、年齢差（田中, 1973）、文化差（Misumi & Ando, 1964）など、これまで数多くの研究がおこなわれてきた。近年の調査からは、時代的変遷として、安楽・多彩型や慈愛・奉仕型の生き方が好まれ、内面生活を重視する生き方を嫌う傾向があること（岡林他, 1995）、性差として、男子学生は女子学生よりも努力型や行動型を高く評価しており、女子学生は多彩型を非常に好ましい生き方としていること（岩崎他, 1984）などが報告されている。

また、都筑（1990）は戦後の国民性調査と同様の項目を用いて、女子大学生の「将来の生き方」意識を調査している。その結果、現代では、戦前多かった「世の中の正しくないことを押しのけてどこまでも清く正しく暮らす」「国家社会のために全てを捧げて暮らしする」が減少し、「金や名誉を考えずに自分の趣味にあった暮らしをする」が半数以上を占めることが報告されている。

2. 内在的視点による方法を用いた研究

外在的視点に基づいた研究は、ライフスタイルや生き方の選択肢を調査者側があらかじめ準備し、被験者の回答を求めるものであった。ここで取り上げるのは、被験者自らが将来を展望し、自由にその内容を表出するというものである。時間的展望の研究領域では、これから的人生において生じると思われる出来事を尋ねる“Events Test”(Wallace, 1956)や、自分の将来について模擬的な手記を書いてもらう“mock autobiography”(Ezekiel, 1968)などが用いられてきた。

園田(1989)の研究では、大学生の将来展望の型として、(a)はっきりとした展望をもてない模索型(11%)、(b)こういう生き方をしたいという生き方の方向性を記述する方針型(26%)、(c)必然的に起こってくる人生の節目を時間的に配列するタイムテーブル型(41%)、(d)新しい仕事や自分の能力を開拓するなど、積極的に何かを獲得しようとする獲得・開拓型(21%)の4つのタイプが挙げられている。展望のあり方については、女性は将来に新しい方向性を探ろうとしているのに対し、男性はスタンダードなパターンを受け入れがちであるという点に性差がみられている。性差はまた、将来展望の具体的な内容においてもみられている。「大学院進学」「海外研修・留学」「仕事」「退職」などの進路や職業に関する出来事は男子学生に多くみられ、「子・孫の誕生」「家族・子どものこと」などの家庭・育児に関係する出来事は女子大生に多くみられること(都筑, 1981), 大学生男子は仕事観、女子では結婚観が精緻化されているのに対し、逆に大学生男子では結婚観、女子では仕事観が未分化であるということ(園田, 1991), 職業的展望については男子の方が密度が高く(Lamm et.al, 1976)広がりが大きいこと(Trommsdorff et.al, 1979)など、男性と女性とでは仕事や家庭に関する展望のあり方が異なるようである。その他、女子学生のみを対象とした調査では、女子学生の将来展望は卒業から就職を経て結婚までが大多数であること(本田, 1978), 就職・結婚・出産は、生き方を大きく左右する出来事として位置づけられていること(都筑, 1984a), 結婚しても仕事を続けようとする仕事群と専業主婦を希望する家庭群とでは、時間的展望や自己の成長をはかるうとする態度に違いがみられること(柏尾, 1997)なども指摘されている。また、性差以外の要因としては、有能感の違いによる検討も行われており、有能感の高い群では、学業や知識・技能に関する内容が多く挙げられているのに対し、有能感の低い群では、娯楽に関する内容が多く挙げられていることが報告されている(南・光富, 1990)。

3. 従来の研究にみられる問題点

ここでは将来展望の質的側面に関する研究について、その問題点を検討する。

まず、外在的視点による「生き方」研究は、青年の望む生き方の内容が直接的にとらえられ、調査者の設定した枠内での比較が可能であるというメリットがある。現代青年の多くが支持する将来の生き方像や、その時代的変遷をとらえることも可能であろう。しかし、この方法でとらえられた将来展望が全ての人にとって同等の意味をもつものか、という点につい

ては疑問が残る。

たとえば、筆者が中学生を対象に実施した調査では、次のような結果が得られている⁽³⁾。そこでは、理想とする生き方の自由記述を求めたが、その中には“分からない”“特ない”“考えたこともない”と答えた中学生が少なくない人数でみられた。しかし、そういう彼らでも、たとえば「将来、人の役に立つ生き方をしたいと思う」という項目を与えられると、半数の者が“あてはまる”と回答する。自分の目指す生き方を特にもっていなくとも「こういう生き方がしたいか」と尋ねられれば評価することができる。しかし、そこで得られた生き方が個人にとって意味あるものといえるだろうか。たとえば質問紙で、「将来、人の役に立つ生き方がしたいと思う」という項目を与えられ，“あてはまる”と答えた二人がいるとしよう。質問紙上では同じ回答であるが、両者の中での意味づけがまったく異なる場合がある。一方にとっては、自分の生き方を懸命に模索する過程で得られた「人の役に立つ生き方」という信念であり、それが個人にとって非常に重要な意味をもっている。それに対し、もう一方にとっては、尋ねられれば“あてはまる”と答えられるが、その生き方はその個人にとってそれほど重要な意味はもっていない。このようなことは、十分考えられるであろう。こうした点を考慮すると、ある生き方を提示し、その中から被験者に選択を求めるという方法のみでは、それが個人にとってどれだけ意味をもつものかということまでは判断できないといえよう。

それでは、同じく将来展望の質的側面を扱ったものではあるが、被験者自らが自発的に表出するという内在的視点による方法についてはどうであろうか。自己概念研究においても、外在的視点による方法と比較して、内在的視点による方法（“20答法”；Kuhn & McPartland, 1954, “Who are you test”；Bugental & Zelen, 1950など）は、自らにとって価値ある重要な側面がとらえられるものとして位置づけられてきた（McGuire & Padawer-Singer, 1976；McGuire & McGuire, 1980）。確かに、調査者があらかじめ項目を設定する方法では、普段ほとんどの意識されることのないようなことでも選択することができるが、自発的に表出する方法では、被験者の意識にのぼらないものは表出しようもない。

しかし、都筑（1982）が「大学生にEvents Testを実施して、彼らの時間的展望の特徴を明らかにしようと試みたが、得られた結果からは、大学生が予想した出来事が彼らにとってどの程度意味のあることなのかという点に関して把握することができなかった。」と述べているように、ここでもやはり、描かれた将来展望が個人にとってどういう意味をもつのかは不明なままである。園田（1989）もまた、mock autobiography を用いた調査において、「億万長者になる」「有名歌手と結婚する」など、実現可能性の低い展望を述べたものが24%にものぼり、「描かれた将来展望が必ずしも十分な現実感を伴っているとはいえない」と指摘している。大学生ともなれば、ほとんどの者が何らかの形で将来展望を描くことはできる。しかし、自由に展望を描かせただけでは、そこで描かれた将来展望が個人にとってどれだけ重要な意味をもつのかという点までは把握できないといえよう。

以上検討してきたように、将来展望のあり方を詳細にとらえるためには質的な検討が必要となってくるが、質的な側面をとらえればそれで十分だというわけでもない。時間的展望の量的側面において指摘した問題点と同様、ここでも、描かれた将来展望が個人にとってどれ

だけ重要な意味をもつのかという点を把握できていないことが問題点として指摘できる。

第3節：将来次元の重要性を考慮する意義

以上、青年の将来展望に関して、量的側面、質的側面の両観点から従来の研究を概観した。研究の目的や測定法は個々の研究で異なるが、共通してみられた問題点は、調査で取り上げた将来展望の側面が個人にとってどれだけ重要な意味をもつかということをとらえきれないことであった。

従来、青年期は人生や生き方など、将来展望をめぐる問題が特に重要な意味をもつ時期として位置づけられてきた。将来の社会生活（職業や結婚）に向けて準備を進めること、両親やその他の大人から精神的に独立し、自分なりの価値観・人生観を確立することは、青年期における発達課題として多くの青年心理学者によって取り上げられてきたことである（井上、1975；桂、1977；Havighurst, 1953）。また、将来の次元が特に問題となりやすい時期が青年期であることも指摘されてきた（溝上・水間、1997；梶田、1988）。時間的展望研究においても、青年期の時間的展望は未来指向的であり（都筑、1984b；白井、1989），それが青年期の自我同一性の確立と関連すること（都筑、1993b；都筑、1994；Shirai, 1997）が報告されている。こうした指摘からすれば、未来指向的な青年が自己像もポジティブで生きがい感の得点も高く（都筑、1984b），ポジティブな達成動機づけを示す（Gjesme, 1979；Teahan, 1958）肯定的なタイプであるという報告も違和感なく受け入れができるであろう。ただし、これを研究の前提とすることには慎重にならなければならない。

心理学における個性記述的研究の重要性を主張したAllport（1937）は、「問題の変数の平均的な（経験的な）意味によってそれぞれの答えに決まった解釈をしてしまうこと」に従来の研究法の問題点があると指摘する。若松（1994）もまた、質問紙を用いた調査法によって、変数間の関連は明らかにされるが、そこに、青年の実像がみえにくい“もどかしさ”を感じると述べている。たとえば、大量調査で得られたデータから変数間の関連を明らかにする場合、個人間の差異は捨象され、無理な平均化を行うことによって結果が非現実的なものになる可能性もある。また、研究者の枠組みから被験者をとらえようとして、結果として得られた回答や分布が被験者の現実の姿を反映していない可能性もある。これらの問題点に対して若松は、「質問紙の回答を彼らの実像にストレートに結びつけることには慎重にならなければならない」と述べ、その対策として、取り上げた変数がもつ現実の重みを把握することを提示している。

近年、将来展望をめぐって青年のさまざまなお方が指摘されている。青年たちの未来への展望は意外に短いことが報告されており（本田、1978；小野・五十嵐、1988）、「現代青年は時間的展望の広がりの無さの中に在る」（吉田・小熊・小倉、1990）ことが指摘されている。また、園田（1989）の調査において、「今まで将来のことなど全く考えたことがなかった」と記述する青年がみられたと報告されているが、同様の記述は筆者が実施した調査においてもみられている。しかし、こうした青年が必ずしも適応的なタイプでないかといえばそ

うではない。園田（1996）が、非目標的・現在的な展望のあり方のポジティブな側面を指摘しているように、必ずしも未来を指向することのみが適応的なあり方ではないからである（白井、1995）。

同じ青年とはいって、その内面世界は多様である。短期大学生の中にも長期的に人生を考えているものと短期的な人生設計しか考えていない者がいると報告されている（都筑、1990）ように、同じ青年、同じ女子大生であっても、将来展望のあり方はさまざまである。それは単に、将来展望の長さや内容が異なることのみを意味するのではない。将来次元に対する重みもまた、個人によって異なるのである。このことをまず、研究の前提としてふまえておく必要があるのでなかろうか。

たとえば、「将来に対する長期的な見通しが持てない」被験者がいるとする。これから的人生を模索し、何とか自分の人生に見通しを持ちたいと強く願っている者、すなわち将来次元が個人にとって非常に重要な意味をもつ場合には、将来の長期的な見通しが持てないことは現在の不適応感へつながるものである。しかし、将来を全く考えたこともない、あるいは、将来の目標に向かって進むことを重視しないなど、将来次元が個人にとってそれほど重要な意味をもたない場合であれば、将来の長期的な見通しがもてなくとも、日々の生活感情にはそれほど影響を及ぼさないであろう。あるいは、「将来は看護婦になりたい」という展望をもっていた場合も同様である。将来次元が非常に重要な意味をもっていれば、そうした展望を実現させようという思いも強くなり、その実現に向けて具体的な活動への取り組みもみられるかもしれない。あるいは、自分の能力に限界を感じ、夢が実現できないことに不適応感が高まることがある。しかし、逆に、将来次元がそれほど重要な意味をもっていないければ、実現への意欲も少なく、特に具体的な取り組みもみられないということも想定される。あるいは、たとえ看護婦になれるという見通しがたたくとも、特に不適応感は高まらないという可能性もある。このように、たとえ同じような展望をもっていたとしても、将来次元の重要性によって、展望そのものの意味は大きく異なる。

従来の将来展望の研究は、青年全体としてどういう展望の特徴がみられるか、あるいは男性と女性にどのような違いがみられるかといったことに主な焦点があてられており、将来展望が個人にとってどういう意味をもつかという個人の視点はほとんど考慮されてこなかったように思われる。しかし、以上検討してきたことを考慮するならば、今後青年期における将来展望の研究をすすめていくにあたって、少なくとも、個人にとって「将来」の次元が重要な意味をもつかどうかをまずふまえておくことが必要となるのではなかろうか。その上で、個人が抱く展望の広がりや明るさ、その内容などを検討していくことが望まれよう。

おわりに

青年期の将来展望は、時間的展望、人生設計、ライフスタイル、人生観など多様な領域が関連するテーマである。本稿では取り上げなかったが、時間的展望の領域で近年注目されている目標研究の成果も、将来展望の質的側面をとらえる際に貴重な視点を提供するものと思

われる。これらの多様なアプローチを取り入れながら、今後、青年の将来展望研究に取り組んでいきたいと考えている。

注

- (1) 時間的展望研究に関しては、これまで多様な観点からレビューされている（小宮山、1973a；大橋、1993；都筑、1982；都筑、1993a；白井、1994など）。
- (2) 「個人が現在達成しようとしていること」をとらえる目標研究においても、その質的側面が詳細に検討されている。ただし、そこには「レポートを書き上げる」「クリスマスプレゼントをつくる」なども含まれており、必ずしも将来を展望した上のものとは限らないという理由からここでは取り上げなかった。
- (3) ここでの調査結果は、筆者の修士論文（1996年）のデータの一部を再分析したものである。

引用文献

- Allport,G.W. 1937 Personality: A psychological interpretations. New York : Holt. (訳摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正共訳『パーソナリティー心理学の解釈』新曜社, 1982)
- Barndt,R.,& Johnson,D.M. 1955 Time orientation in delinquents.Journal of Abnormal and Social Psychology,51,343-345.
- Brock,T.C.,& Giudice,C.D. 1963 Stealing and temporal orientation. Journal of Abnormal and Social Psychology,66,91-94.
- Bugental,J.F.T.,& Zelen,S.L. 1950 Investigations into the 'self-concept' I : The W-A-Y technique. Journal of Personality ,18,483-498.
- Coleman,J.,Herzberg,J.,& Morris,M. 1977 Identity in adolescence;present and future self-concept. Journal of Youth and Adolescence,6(1),63-75.
- Cottle,T.J. 1967 The circles test:an investigation of perceptions of temporal relatedness and dominance. Journal of Projective Techniques and Personality Assessment, 31(5),58-71.
- Cottle,T.J.,& Pleck,J.H. 1969 Linear estimations of temporal extension:the effect of age,sex,and social class. Journal of Projective Techniques and Personality Assessment,33,81-93.
- Davis,A.,Kidder,C.,& Reich,M. 1962 Time orientation in male and female juvenile delinquents. Journal of Abnormal and Social Psychology,64,239-240.
- Epley,D. & Ricks,D.R. 1963 Foresight and hindsight in TAT. Journal of Projective Techniques,27, 51-59.
- Ezekiel,R.S. 1968 The personal future and peace corps competence.Journal of personality & Social Psychology(monograph supplement),No.2,Part 2.
- Gjesme,T. 1979 Future time orientation as a function of achievement motives,ability, delay of gratification, and sex. The Journal of Psychology,101,173-188.
- Havighurst,R.J. 1953 Human development and education.New York:Longmans. (莊司雅子監訳『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部, 1995)
- 本田時雄 1978 女子青年の時間的展望—特に女子学生の将来計画と不安と悩みについて— 青年心理, 10, 26-33.
- 井上健治 1975 社会のなかの青年 井上健治・柏木恵子・古沢頼雄（編）『青年心理学』有斐閣, 222-234.
- 岩崎正子・石塚正一・原一雄 1984 ICU在学生の人生観の調査研究—20年前との比較—国際基督教大学学報：I - A : 教育研究, 26, 85-106.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学（第2版） 東京大学出版会（初版1980）
- 柏尾真津子 1997 女子学生の目標と時間的展望との関連について 関西大学大学院「人間科学」—社会学・心理学研究一, 46, 175-185.
- 勝俣暎史・篠原弘章・村上みどり 1982 非行少年の時間的展望—少年鑑別所収容少年の場合— 熊本大学

- 教育学部紀要（人文科学）,31, 267-277.
- 桂広介 1977 人生の過渡期としての青年期 桂広介編『青年期—意識と行動—』金子書房, 5-16.
- Kendall,M.B.,& Sibley,R.F. 1970 Social class differences in time-orientation:artifact? Journal of Social Psychology,82,187-191.
- Klineberg,S.T. 1967 Changes in outlook on the future between childhood and adolescence. Journal of Personality and Social Psychology,7,185-193.
- 小宮山要 1965 家出少年の生活態度に関する研究—特に時間的展望を中心として— 科学警察研究所報告（防犯少年編）, 6, 38-46.
- 小宮山要 1973a 青年の時間的展望に関する研究 青年心理学研究会（編）『わが国における青年心理学の発展』金子書房, 125-150.
- 小宮山要 1973b 青年の時間的展望に関する研究（第1報）高校生の未来の展望の明暗と生活意識との関係 日本心理学会第37回大会発表論文集, 234-235.
- 小宮山要 1975 青年の時間的展望に関する研究（第2報）大学生の未来の展望の明暗と生活との関係 日本心理学会第39回大会発表論文集, 510.
- 小宮山要 1989 青年の時間的展望に関する研究1—未来の時間的展望の明暗と時間次元に対する態度の比較 — 桜美林短期大学紀要, 25, 105-126.
- 小宮山要・星悦子・高橋和雄・川田三夫 1976 非行少年の生活態度に関する研究 科学警察研究所報告（防犯少年編）, 17(1), 18-23.
- 小宮山要・松本恒之・渥美冷子 1966 非行少年の意識態度に関する研究 科学警察研究所報告（防犯少年編）, 7(1), 1-8.
- 河野莊子 1994 なぜ、非行少年は過去の体験を未来に生かそうとしないのか—時間的不連続性と原因帰属からの検討— 犯罪心理学研究, 32, 1-10.
- Kuhn,M.H., & McPartland,T.S. 1954 An empirical investigation of self-attitudes. American Sociological Review,19,68-76.
- 桑原知子・伊藤美奈子 1994 現代青年におけるライフスタイルについての探索的研究 青年心理学研究, 6, 29-39.
- Lamm,H.,Schmidt,R.W.,& Trommsdorff,G. 1976 Sex and social class as determinants of future orientation (time perspective) in adolescents. Journal of Personality and Social Psychology,34,317-326.
- Lens,W. 1975 Sex differences in attitude towards personal past,present,and future. Psychologica Belgica,15,29-33.
- LeShan,L.L. 1952 Time orientation and social class. Journal of Abnormal and Social Psychology, 47,589-592.
- Lessing,E.E. 1968 Demographic,developmental, and personality correlates of length of future time perspective(FTP). Journal of Personality,38,183-201.
- Lessing,E.E. 1972 Extension of personal future time perspective,age, and life satisfaction of children and adolescents. Developmental Psychology,6,457-468.
- Lewin,K. 1951 Field theory and social science. Harper & Brothers. (猪股佐登留訳『社会科学における場の理論』誠信書房,1956)
- 松下美和子・国眼真理子 1993 女性のライフサイクルに関する研究(10) 日本教育心理学会第35回総会論文集, 332.
- McGuire,W.J.,& McGuire,C.V. 1980 Salience of handedness in the spontaneous self-concept. Perceptual and Motor Skills,50,3-7.
- McGuire,W.J.,& Padawer-Singer,A. 1976 Trait salience in the spontaneous self-concept. Journal of Personality and Social Psychology,33,743-754.
- Meade,R.D. 1971 Future time perspectives of college students in America and India. The Journal of Social Psychology,83,175-182.
- 南博文・光富隆 1990 青年期における未来展望と有能感の関係に関する研究 広島大学教育学部紀要（第1部）, 38, 241-248.

- Misumi,J & Ando,N. 1964 A Cross-Cultural And Dia-Chronical Study on Japanese College Student's Responses to the Morris' Value Scale.Psychologia,Vol.7,175-184.
- 見田宗介 1966 値値意識の理論 弘文社
- 溝上慎一 1995 WHY答法についての理論的考察 大阪大学教育心理学年報, 4, 61-72.
- 溝上慎一・水間玲子 1997 「自我—自己」からみた青年心理学研究—意義と問題点,今後の課題一 京都大学高等教育研究,3,25-45.
- Morris,C. 1956 Varieties of human values. Chicago: Chicago Univ.Press.
- 南雲正義・川口和男 1979 非行少年と時間的展望 犯罪心理学研究, 17 (特別号), 24-25.
- 根本橋夫・中沢千鶴加 1990 時間不安と自我同一性,達成動機,および自己像との関係 千葉大学教育学部研究紀要,38,47-54.
- Nurmi,J.-E. 1989 Development of orientation to the future during early adolescence:a four-year longitudinal study and two cross-sectional comparisons. International Journal of Psychology, 24,195-214.
- O'Connell,A.N. 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional,neotraditional and nontraditional women. Journal of Personality,44,675-688.
- 大橋靖史 1993 非行少年の生きる時間—文献による考察— ヒューマンサイエンス（早稲田大学総合研究センター）,6, 66-77.
- 大橋靖史・大橋和佳 1989 非行少年における時間の見透かしの構造の分析 犯罪心理学研究, 27 (特別号 : 日本犯罪心理学会大会発表論文集), 50-51.
- 岡林秀樹・大井直子・原一雄 1995 大学生の人生観の年代的変遷 心理学研究, 66, 127-133.
- 小野直広・五十嵐敦 1988 青年期の時間的展望—TP-SCTによる考察— 福島大学教育学部論集, 44, 1-13.
- 尾崎仁美 1994 大学生の価値観に関する一研究—自己の成長と進路に関わる問題について— 大阪大学人間科学部卒業論文（未公刊）
- 尾崎仁美 1996 中学生の「生き方意識」と「生き方教育」 大阪大学人間科学部修士論文（未公刊）
- Platt,J.J.,& Eisenman,R. 1969 Birth order and sex differences in future time perspective. Developmental Psychology,1,70.
- Roberts,A.H.,& Greene,J.E. 1971 Cross-cultural study of relationships among four dimensions of time perspective. Perceptual and Motor Skills,33,163-173.
- 佐藤公代・赤澤淳子・寺川夫央 1996 青年期女子における自我同一性と性役割意識に関する研究—将来希望するライフスタイルによる差異の検討を中心として— 愛媛大学教育学部紀要（教育科学）,42(2), 47-60.
- Shannon,L. 1975 Development of time perspective in three cultural groups:a cultural difference or an expectancy interpretation. Developmental Psychology,11,114-115.
- 白井利明 1985 児童期から青年期にかけての未来展望の発達 大阪教育大学紀要（第IV部門）, 34, 61-70.
- 白井利明 1986 現代青年の未来展望について 大学進学研究, 8(3), 41-47.
- 白井利明 1989 青年の時間的展望の構造(2)—サークル・テストとライン・テストの結果から— 大阪教育大学紀要（第VI部門）, 38, 183-196.
- 白井利明 1994 時間的展望の生涯発達に関する研究の到達点と課題 大阪教育大学紀要（第IV部門）, 42, 187-216.
- 白井利明 1995 現代における“ポジティブな現在指向”の意義と検討課題 大阪教育大学教育研究所報, 30, 61-68.
- Shirai,T. 1997 Time orientation and identity in adolescence and middle age. 大阪教育大学紀要（第IV部門）, 45, 207-226.
- Siegman,A.W. 1961 The relationships between future time perspective,time estimation, and impulse control in a group of young offenders and in a control group.Journal of Consulting Psychology,25,470-475.
- 園田直子 1989 時間的展望に見られる“possible selves”的認知 九州帝京短期大学紀要, 1, 7-21.
- 園田直子 1991 時間的展望における接近的および回避的“possible selves”的認知 九州帝京短期大学紀要, 3, 1-15.

- 園田直子 1996 非目標的な時間的展望についての考察 久留米大学文学部紀要 人間科学科編, 第9-10号, 45-61.
- Stein,K.B.,Sarbin,T.R.,& Kulik,J.A. 1968 Future time perspective:Its relation to the socialization process and the delinquent role. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*,32,257-264.
- 陶山智 1988 Time perspectiveのextensionと自己像の関係について 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 266-267.
- 陶山智 1989 青年期におけるTime perspectiveの研究—extensionと自己像との関連について— 岡山理科大学紀要(人文・社会科学), 24, 143-154.
- 田中 賢 1973 価値意識の研究(4)—Morrisの「生き方」の評定を中心として— 愛媛大学教育学部紀要(教育科学), 20, 31-50.
- Teahan,J.E. 1958 Future time perspective,optimism, and academic achievement. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*,57,379-380.
- Trommsdorff,G.,Lamm,H.,& Schmidt,R.W. 1979 A longitudinal study of adolescents' future orientation (time perspective). *Journal of Youth and Adolescence*,8,131-147.
- 土中幸宏 1988 人の生き方に関する研究(36) 一人生観・価値観の形成と時間意識について(3) — 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 14-15.
- 都筑学 1981 大学生における時間的展望の研究 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 424-425.
- 都筑学 1982 時間的展望に関する文献的研究 教育心理学研究, 30, 73-86.
- 都筑学 1984a 女子青年の時間的展望(1) 日本教育心理学会第26回総会発表論文集, 420-421.
- 都筑学 1984b 青年の時間的展望の研究 大垣女子短期大学研究紀要, 19, 57-65.
- 都筑学 1990 女子青年の時間的展望に関する縦断的研究 教育学論集(中央大学教育学研究会), 32, 49-66.
- 都筑学 1993a わが国における時間的展望研究の概観 教育学論集(中央大学教育学研究会), 32, 49-66.
- 都筑学 1993b 大学生における自我同一性と時間的展望 教育心理学研究, 41, 41-48.
- 都筑学 1994 自我同一性地位による時間的展望の差異—梯子評定法を用いた人生のイメージについての検討— 青年心理学研究, 6, 12-18.
- Verstraeten,D. 1980 Level of realism in adolescent future time perspective. *Human Development*,23, 177-191.
- 若松義亮 1994 大量調査式相関研究に感じる“もどかしさ”とその対策への試論 青年心理学研究, 6, 84-88.
- Wallace,M. 1956 Future time perspective in schizophrenia. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*,52,240-245.
- Wohlford,P.,& Herrera,J.A. 1970 TAT stimulus-cues and extension of personal time. *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*,34,31-37.
- 山本晴雄・松本恒之・小宮山要・渥美冷子・新田健一・台利夫 1968 非行性とその形成依田新(編)『現代青年の人格形成』金子書房, 210-239.
- 山中忠茂 1970 時間判断法による青年の前途展望の研究 教育心理学研究, 18, 48-56.
- 吉田昭久・小熊均・小倉美智子 1990 Time perspectiveとpersonalityとの関連Ⅷ—Time perspectiveの心的構造— 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学,芸術), 39, 57-73.

An examination of study on future life perspective in adolescent.

～Consideration of significance of future dimension for the individual～

Hitomi Ozaki

The purpose of this study was to review past researches on future life perspective in adolescent, and to examine the further direction. Researches on future life perspective were reviewed from the quantitative and the qualitative aspect. The quantitative studies were divided into the viewpoint of cognition and affection; the former dealt with the extension of the future perspective, and the latter dealt with positive or negative evaluation for their own future. The qualitative studies were divided into the viewpoint of outside and inside frame; the former was an approach that subjects were asked to select his own future life perspective in some items given by a researcher, and the latter was that subjects were requested to represent his own future life perspective spontaneously.

As the problem of these studies, it was pointed out that there has been too little attention to the significance of the future dimension for the individual. As the further remarks, the extension and the content of future life perspective would be necessary to examine, after considering the importance of future dimension for the individual.